

第20回東海小児整形外科懇話会

当番幹事：本庄宏司（愛知医科大学整形外科）

日時：2005年2月12日（土）

場所：大正製薬（株）名古屋支店 8階ホール

主題：小児の外傷

一般演題 座長：船橋建司

1. Léri-Weill dyschondrosteosis の2症例

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科

○辻井雅也・西山正紀・二井英二

三重大学整形外科 平田 仁・内田淳正

川口整形外科 川口 篤

三重県立総合医療センター整形外科 加藤秀一

Léri-Weill dyschondrosteosis (LWD) は両側性の Madelung 変形と中間肢節の短縮を特徴とする比較的稀な骨系統疾患である。今回、男女1人ずつの LWD を経験した。症例は19歳・男性と34歳・女性である。両者とも Madelung 変形と中間肢節の短縮を認めたが、その程度は女性例で強く、さらに思春期に手関節痛が初発していた。文献的考察を加えて報告する。

2. Milroy 病（遺伝性リンパ浮腫）の母子例

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科

○二井英二・西山正紀・辻井雅也

三重中央医療センター小児科 小俣 真

富山医科薬科大学小児科 二谷 武

三重大学整形外科 内田淳正

上野総合市民病院整形外科 山崎征治

Milroy 病は、生下時より下肢にリンパ浮腫のみられる極めてまれな遺伝性疾患である。今回我々は、生後1か月の女兒で両側下腿から足部にかけて著明なリンパ性浮腫を認め、母親にも同様の症状がみられた Milroy 病と思われる母子例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

3. Angelman 症候群患者の整形外科的問題について

愛知県青い鳥医療福祉センター整形外科

○古橋範雄・岡川敏郎・栗田和洋

Angelman 症候群は第15染色体の異常を病因とする重度精神遅滞、てんかん、発作的な笑い、筋緊張低下、小頭、下顎突出、操り人形様失調性歩行等の特徴とする疾患であるが、整形外科的問題についての報告は少ない。我々は当センターに通院および入所している同症候群患者5名を対象に整形外科的問題について調査したのでこれを報告する。

主題：小児の外傷 座長：神谷光広

4. 小児の環軸椎回旋位固定に対する治療経験

あいち小児保健医療総合センター整形外科

○野上 健・服部 義

小児の環軸椎回旋位固定8例（男子2例、女子6例、平均年齢7歳）を経験した。全例、入院での牽引治療により整復した後、短期間のカラー固定を行った。6例は良好な整復位が得られ再発を認めなかった。2例で再発を認め、1例は再度の入院牽引治療、カラー固定により改善を得たが、1例は整復位を得たものの、可動域制限を伴わない頸部痛の発現と消失を頻回に認めるようになった。

5. 放射線治療後9年で両大腿骨頭すべり症を生じた1例

名古屋大学整形外科

○加藤光康・北小路隆彦・鬼頭浩史
平野祐司・寺島広昭・石黒直樹

症例は初診時11歳男児、両大腿骨頭すべり症。神経芽細胞腫にて2歳時に右副腎摘出術と15 Gyの放射線治療を施行されていた。2003年、両股関節痛・跛行にて近医受診、上記診断にて当院紹介となった。当院にて初診時PTAは右40°左44°であった。1か月の牽引後 In situ pinning を施行、術後3年経過し経過は良好である。今回、放射線治療後の同疾患に関し、文献的考察を加え報告する。

6. 小児大腿骨頸部骨折後の骨頭壊死に対する血管柄付き腸骨移植の経験

名古屋市立大学整形外科

○若林健二郎・和田郁雄・堀内 統
大塚隆信

厚生連中濃病院整形外科 寺澤貴志

小児の大腿骨頸部骨折は比較的稀な外傷であるが、骨折のタイプによっては骨頭壊死を合併し治療に難渋することがある。今回、小児大腿骨頸部骨折後の骨頭壊死に対し血管柄付き腸骨移植を行ったので報告する。症例は13歳男児、交通事故にて受傷し、他院で骨接合術を受けるも骨頭壊死が発生、当院にて深腸骨回旋動静脈による血管柄付き腸骨移植を行った。術後約1年の現在、骨頭壊死はほぼ修復し collapse の進行も認めない。

7. 若年性骨粗鬆症の1例

三重大学整形外科

○須藤啓広・吉川智朗・内田淳正

三重県立草の実りハビリテーションセンター整形外科
二井英二

症例は15歳男児。13歳時に右手関節を捻挫した際、近医で手の X-p を撮影し、骨粗鬆化を指摘された。当院で腰椎の骨密度を測定したところ同年代の67%という結果であり、その後カルシウムとビタミンDの投与を開始したが軽微な外傷で左大腿骨近位部骨折、左胫骨遠位部骨折を来している。生後6か月頃に細菌性髄膜炎に罹患し、その後抗てんかん薬を服用していたが、特異な顔貌から骨系統疾患も疑われるため、診断についてご検討願いたい。

8. 稀な骨折型を合併した学童期骨形成不全症の1例
多治見市民病院整形外科

○藍澤靖仁・船橋建司・天野泰憲
北本和督

症例は11歳男児。Sillence I型の骨形成不全症例である。2004年8月21日、バレーボールの練習中、ジャンプをした際に右膝関節痛出現。単純X線像にて膝蓋骨下極の sleeve fracture と診断。鋼線締結法を用いた観血的整復固定術を施行した。その後、外来にて経過観察中、10月15日、自宅で転倒。単純X線上、両側肘頭骨折を認め、同日、同様に鋼線締結法による観血的整復固定術を施行した。

主題：小児の外傷 座長：橋本晋平

9. 坐骨結節裂離骨折の1例

旭労災病院整形外科

○齋藤正敏・花林昭裕・白井 透
杉藤紘一

思春期に起こる坐骨結節裂離骨折の治療法は、意見の別れるところである。しかし、保存療法は骨片に付着する筋群の緊張により偽関節となり、疼痛の残存、筋力低下、さらに旺盛な仮骨形成に伴う坐骨神経痛を起こす可能性がある。今回我々は転位の大きい本骨折に対し観血的に固定を行い、良好な結果を得たので、文献的考察を加え報告する。

10. 胫骨近位骨端線不全切断(Gustilo III C)の1例

海南病院整形外科

○勝田康裕・土屋大志・西 源三郎
多湖教時・向藤原由花・安藤喜一郎
蓮尾隆明・植田裕昭

症例は6歳、男児。通学中トラックに引かれる。直ちに当院へ搬送。胫骨近位骨端線で粉碎骨折、血行は途絶。下腿三頭筋のみで連続していた不全切断であった。血行再建、骨接合行い術後3年経過した現在、脚長差1cmで歩容異常も認めず経過良好である。文献的考察を加え報告する。

11. 創外固定器にて治療した小児下肢骨端線障害の4例

あいち小児保健医療総合センター整形外科

○服部 義・野上 健
愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

伊藤弘紀
名古屋大学整形外科 北小路隆彦

骨端線障害による下肢の変形短縮4例に対して、創外固定器にて治療したので報告する。使用したのはイリザロフ創外固定器3例、オルソ

フィックス創外固定器1例であり、原疾患はオリエール病、骨折による骨端線損傷に対する骨端線解離術後再発、骨系統疾患(dyschondrosteosis)、多発性化膿性関節炎後遺症である。手術時年齢は5歳、8歳、8歳、9歳、罹患部位は大腿骨遠位2例、下腿骨近位1例、大腿骨近位と遠位両方1例であり、外反膝変形2例、内反膝変形2例であった、1例を除き、変形とともに著明な脚長差があり、骨延長も同時に行った。

12. 脚長差を有する小児先天性疾患に脚延長を行った2症例

愛知医科大学整形外科

○澤田重之・橋本晋平・桜木哲太郎
佐藤啓二

脚長差を生じた男児2症例に対して、大腿および下腿で、イリザロフ法を用いて同時期に骨延長術を施行した。現在2例とも日常生活動作など安定しており、術後良好である。近年、このイリザロフを用いた脚延長や変形矯正について報告されている。その施行するタイミングや管理方法、またそれらの問題点について考察する。

13. 胫骨遠位骨端線部分閉鎖による下腿変形に対してイリザロフ法を行った2例

JA 岐阜厚生連中濃病院整形外科

○寺澤貴志・佐多和仁・波頭経俊
奥地 裕・戸野祐二・益田智子

症例は12歳、女性と14歳、男性である。いずれの症例も幼少期に下腿骨遠位部骨折を受傷しており、成長に伴い胫骨遠位骨端線部分閉鎖による下腿変形が生じてきた。変形中心が胫骨遠位部に存在するため、従来の楔状骨切りとプレート固定は困難であり、脚長差の補正も必要なことからイリザロフ法を選択した。胫骨遠位部での変形矯正と胫骨近位部での脚延長を行い、2例とも alignment は良好になった。

特別講演 I

座長：本庄宏司

日本整形外科学会研修会
骨端線損傷の基礎と臨床

京都府立医科大学整形外科助教授

金 郁喆

特別講演 II

座長：佐藤啓二

日本整形外科学会研修会

先天性股関節脱臼の診断と Rb 治療

昭和大学藤が丘病院整形外科教授

斎藤 進